

激動の 2025 年と来年に向けて

社外理事 幸田 博人

激動の 2025 年もあと残すところ、1 ヶ月半となりました。今年の夏の酷暑は、歴史的な暑さで記録的でしたが、足元、冬が近くなり、秋の短さを嘆いている方も多いのではと思います。

この 2025 年は、1 月トランプ大統領の再登場により、世界中がその一挙手一投足に翻弄され、今までのグローバルな社会・経済構造の枠組みを前提として歩んできた世界に大きく変化をもたらしています。従来米国が主導していた同盟国枠組みでの安定した世界秩序は、大きく変容しようとしています。トランプ関税などの影響がグローバルな貿易にどの程度の影響を与え、またサプライチェーンにどのような変化をもたらすか、まだまだ見通せない状況です。また、米中対立構造は、中期的に深刻化する方向で動いていくかなど様々な変化をもたらさそうです。ブロック化した世界経済構造などが、移民問題、格差問題、世界の内向き志向などでより先鋭化すると思われます。米国と同盟国との関係にも大きな変化をもたらしつつあります。今まで世界が議論はしつつも、気候変動対応などで足並みを揃えつつあったところから大きな変化をもたらすでしょう。

こうした不透明な状況や世界の構造変化が動きだしたにもかかわらず、世界の株式市場は、最高値更新にチャレンジしています。8 月 18 日に日経平均株価が史上最高値（4 万 3,714 円）をつけ、8 月 28 日は NY ダウ 45,636 ドルで最高値更新しました。その後、9 月 17 日米国 FRB 利下げ再開（0.25%）、9 月 22 日日経平均株価初の 4 万 4,5493 円（史上最高）、9 月 19 日日銀金利据え置き、ETF の市場売却方針発表などあり、また、日本では高市新政権発足、AI 投資なども材料に、10 月末には東証 5 万 2,411 円の市場高値、米国 NY ダウは 4 万 7,000 ドル台など市場最高値を更新し続けています。

こうした中で、2026 年をどう読み解くか、この年末に向けて、アナリストやエコノミストの方々などから様々な見方が出てくると思います。来年は、2025 年よりさらに、不透明で難しい状況が続くとも思われます。私は、リスク資産に対する相応の過熱感もあると思っていますが、2026 年に向けて様々な見方を、ぜひ咀嚼し、来年に臨んでもらえればと思います。

皆様方、年末年始に向けて、あわただしい日々が続くと思いますが、ぜひ、少しでも時間があれば、新書など手にとっていただければと思います。新刊以外になりますが、いくつかご紹介します。経済関係では、吉川洋著『人口と日本経済』（中公新書：2016 年）です。10 年前に人口減少社会への警鐘を鳴らしつつ、イノベーションを処方箋として未来への投資を経済学的な視点から訴えていたものです。また、猪木武徳著『経済社会の学び方』（中公新書：2021 年）です。少し専門的な領域の新書ですが、現在の経済社会をどう読み解くかについて、データ分析の有用性と限界、歴史に「学ぶ」重要性、心理的な「期待」の捉え方など、現実の社会や経済を見る様々な視点が提示されています。分野を広げると、辰濃和男著『ぼんやりの時間』（岩波新書：2010 年）です。生活の中で、「ぼんやり」の有用性や貴さを、文人などの話を引用しながら、エッセイ的に綴っています。年末年始、大変あわただしいですが、少しでも「ぼんやり」の効能に目覚めて、大きな変動があるかもしれない年明けに備えたいかがでしょうか。

激動の 2025 年を超えて 2026 年、ますます不透明な状況で、さらなる資産形成の重要性は確実に高まります。資産形成を考えて取り組むことは大切です。例えば、積み立て、分散投資など「金融リテラシー」の基本に忠実に取り組めば、中・長期的には個々人の生活上大きな力となると確信しています。激動の時代、専門家の意見に耳を傾けつつ、どう資産形成に進んでいくか、個々人にとって大事な時代に入ってきていると思います。

(2025 年 11 月 16 日記)